

今年六月二二日、旭川医科大（旭医大）の学長選考会議を取材していた北海道新聞の記者（二二）が建造物侵入容疑で道警に逮捕された。記者が取材活動を理由に逮捕されたことそのものだけでなく、その後の道新の対応、世論の反応、どれをとっても衝撃的で、内省を強いられる事態だった。

旭医大をめぐるのは、吉田晃敏学長の学内外に対するハラスメントも含めた言動が旭川医療圏の混乱を招いた。地元記者は以前から同大の取材対応への不満があった。報道責任者への対応を求めたが応じず、メールでのやりとりは「回答を差し控える」と実質無回答が続いた。その状況での、吉田学長に対する解任請求を審議する学長選考会議が設置した外部調査委員会が非公開の会合を開いたのが六月二二日。地域医療を担う旭医大で何が起きているのか。その会議に注目が集まっていた。

同日午後四時半ごろ、大学職員が会議室の外に出たところ、携帯電話で会議を録音していた記者とはちあわせた。記者が目的や身分を名乗らず立ち去ろうとしたため、職員が身柄を取り押さえる「常人逮捕」に踏み切り、身柄を警察官に引き渡した。この逮捕を報じる記事で、道新は記者の名前を实名報道。道新以外は匿名報道の判断だった。道新もウェブ版記事を午前中に匿名に切り替えた。

道新記者逮捕の衝撃

◇ ◇
 事件はインターネットを中心に大きく拡散された。一部の報道記者らが報道の自由の観点から「逮捕は不当」「道新は記者を守れ」と発信すると、それを批判する形で反発はさらに増加。「取材と言えは何をしでもいいと言う特権意識」を批判するものだった。

さらに、道新が七月七日朝刊で発表した「社内調査報告」が批判的となった。調査報告は会員登録をしなければ読めない仕様で、コーポレートページでの記載がない。内容も不十分だった。記者が逮捕されたことが仕方ないのか、不当かという会社としての評価が一切無い。大学や警察の対応の問題には一切触れず「取材手法に問題があった」と事実上の謝罪とも取れるが、記者教育に問題があった」と、記者の問題行動に責任を押しつける姿勢に終始している。事実関係の説明も不十分だ。逮捕された記者は入社三カ月の試用期間中だった。立ち入りが禁止されている四階に行くと指示を受けたというが、「誰が指示したかはつきりしない」という。

◇ ◇
 この調査報告掲載の同日夜に毎日新聞のウェブ版にアップされた、元道新記者、高田昌幸氏の道新批判は大きく拡散した。説明不足や現場記者に責任を押しつける姿勢

を批判。メディア全体に対し「報道機関は「報道目的なら何をやってもいい」と思っている」と批判されている。市民と報道機関の間にもすくく深い溝ができていく。「説明責任を十分に果たせない報道機関はジャーナリズムの担い手にはなれない。市民の支持あつてこそ権力監視が成り立つ」と警鐘をならした。

大いになぜか。ただ、公共性が高い機関でありながら情報開示にまともに対応しない旭医大ではなく、そこを突破しようとした報道機関の方に市民の批判が向けられる現実には戸惑いもしている。インターネットの言論が世論の全てとは思わないが、それでも高田氏の言う「溝の深さ」に危機感を覚える。道新の調査報告は、さらに溝を深くしてしまった。

だからこそ、道新は事態の沈静化を目指すのではなく毅然と市民に理解を求めてほしい。道新が詳細を明らかにしていないため断言はできないが、逮捕に至った経緯は警察と大学当局によるジャーナリズムへの脅しと感ずる。取材に問題があり逮捕はやむなしと判断したとしても、取材自体の必要性と正当性、大学側の問題は訴えなければいけない。報道機関の責務で幹部の責任だ。メディア全体に関わることで、「記者教育必要」で逃げている場合ではない。

△ 隈▽